

豊田市では、放課後に児童クラブがあります。06年から3年続けて、団塊の世代の先生方が退職されますので、そういう方のお力をお借りして、何とかその学校の空き教室でも「ゆめの木教室」の機能を展開できないか。また、公立の中学校ではクラブ活動などがあります。そういう中で補習をしていただけるような、学校でクラブというような位置づけでそういうことが可能にならないのかとか、いろいろな方法を模索しています。

団地から出て、集住ではなく、点在地域に引っ越す子もおりますので、市全体として外国籍の子がこぼれてしまうことがないように仕組みをつくっていくことが必要なのではないかと思います。それに当たって、8年間放課後学習支援の活動を続けてきておりますので、使える部分というか、スタッフ研修とか、さまざまなノウハウの蓄積を皆さんに使っていただきたいと思っています。また、他地域でも何かお役に立てることがありましたら、ぜひ言ってください。

まとめかまとめではないかよく分かりませんが、学校と連携する上でとても重要だと私自身が感じているのは、1番目は継続だと思います。1年の活動では学校との信頼関係をつくっていくのは本当に難しい。私たちはむしろ特別な例だと思っています。それをそれぞれの市町村で、では、どういう形なら、その地域での継続が可能なのかを模索する必要があると思います。とにかく継続していくことがとても重要だと思います。

もうひとつは透明性です。何をやっているのか分からないという状況が一番よくないと思います。こちらの方からいろいろな情報を発信して行って、そして、透明性を出していくことで信頼関係が生まれると思いますので、その継続性と透明性は非常に重要ではないかと思います。

藤田 次に福岡市東区の香椎浜小学校「よるとも会」副代表、古賀美津子さんに会の活動を報告していただきます。

■ 福岡市立香椎浜小学校親子日本語教室「よるとも会」

古賀美津子 福岡市の親子日本語教室「よるとも会」の古賀です。まず、私が住んでいる地域、福岡市の香椎浜についてお話しします。香椎浜小学校校区という地域ですが、半径1キロ以内に2,000世帯の人たちが暮らしているところです。その中に外国から来られた方々が200世帯以上います。私たちの生活の中では、お買い物に行っても、学校に行っても、道を歩いていても、外国の方とすれ違っ



古賀美津子

たり、お話をすることが必ずあるというような生活を私たちは毎日しています。私は香椎浜に住んで14年になりますが、今、私の上の息子が13歳で中学校2年生ですが、その子が歩けるようになったぐらいから、お散歩していると、同じぐらいの子を連れて外国からのお母さんやお父さんといろいろな子どもについて話していくうちに、たくさんお友達ことができました。

いろいろ困っているということで話を聞いていたのですが、その方たちがだんだん私の個人的なお友達として増えていって、学校からのお便りや区役所からのお便りを持って、うちに集まってくるようになりました。その状況というのがほとんど毎日のようにうちに来て、わが家はキッチンとダイニングとリビングが続いているようなマンションですが、まずキッチンのダイニングのテーブルのところに1家族、リビングのソファに1家族、そして、リビングのフロアに1家族。家族みんなで来られて、みんな学校からのお便りや役所からのお便りを手に相談に来られて、リビングのテーブルで私が通訳をしながら、お便りの説明をしたりしていました。

◆ 何が必要か最初は分からなかった

そうこうしているうちに、毎日こういうお便りの読み聞かせに5～6時間費やすようになりました。主人が仕事を終えて帰ってきて、さあ、ご飯を食べようかと言うと、外国からのお母さんやお父さんがリビングのところにいて、もう帰ってきたのという感じで、夕ご飯も作っていないような状況がありました。私も子どもが2人いて、子育てをしながら、こういった支援をするにもすごく限界を感じました。だからといって、私の家のリビングに集まってこられる人たちは本当に困っていて、じゃあ、もう時間がないから帰ってと言える状況ではありませんでした。子どもの教育のことも真剣に考えている方ばかりでしたし、その方々と同じぐらいの年齢の子どもを持つ母親の気持ちとしては、時間がないからどこかに行って、と言える感じではありませんでした。

こんなに毎日毎日、誰かの通訳や子どもの話を自分1人で対応するのはとてもじゃないけどできないし、絶対に何かが必要なんだろうということはずっと思っていました。何が必要なのか、当時は分かりませんでした。何かが必要だけれども、何が必要か分からないし、学校に言いに行っても、当時は学校も対応してくれるわけではなかったですし、どうにかしなければいけないということで、まず

自分の子どもが通っていた香椎浜小学校というところに、PTAの会のひとつとして「フレンズ会」を立ち上げることにしました。

この会は、そこの保護者たちがお便りなどを易しい日本語にして、外国から来た保護者の方に読み聞かせをするというようなことを活動としてやってきました。でも、それは昼間の会で、それでもまだまだニーズがあるのではないかということで、親子日本語教室「よるとも会」を立ち上げるという流れになり、日本語教室が誕生しました。

この「よるとも会」というのは日本語教室ですが、たぶん通常の日本語教室とは違うのではないかと、皆さんはお聞きになっていると思います。日本語を教えるスタッフが一度も日本語を教えた経験がなかったり、外国の人と接したことがあまりなかったりといった人が集まって、地域に住んでいる外国の方々と触れ合うような会になっています。

「よるとも会」にはキッズルームもありまして、ゼロ歳児から高校生ぐらいまでが通っています。そこでもゆっくりと勉強をしたり、みんなで遊んだりしながらやっています。毎週木曜日の午後6時半から8時半にやっています。毎回何が起こるか分からない、本当に不安の中でやっている会ですが、これからもこういったにぎやかな雰囲気教室を運営していければいいなと思います。会代表の吉谷武志先生から補足をお願いします。

吉谷武志 「よるとも会」は、最初は「フレンズ会」からスタートしています。古賀さんは先ほど言いませんでしたが、彼女のお友達の話ですが、ご主人があるとき帰宅して、「ここは誰の家だ」とボソッと言われたそうです。病院の待合室のごとく入り口から家中が占拠されているという状況なわけです。そのご主人も優しい人なので協力してくれて、私たちの会は5年も続けているのですが、その5年間、毎週木曜日に彼女は学校に来ていますが、それでも一言も文句をおっしゃらずにいる方です。後に当時どう思っていたかについて、その話をしてくれました。このような状況だったので、古賀さんたちが学校のPTAの会合で、こういう文書というのは学校で何とかしないとイケないのではないかという話をしたら、PTAの方がそうだねということで、地域にこういう会をつくりたいとなり「フレンズ会」というのができました。



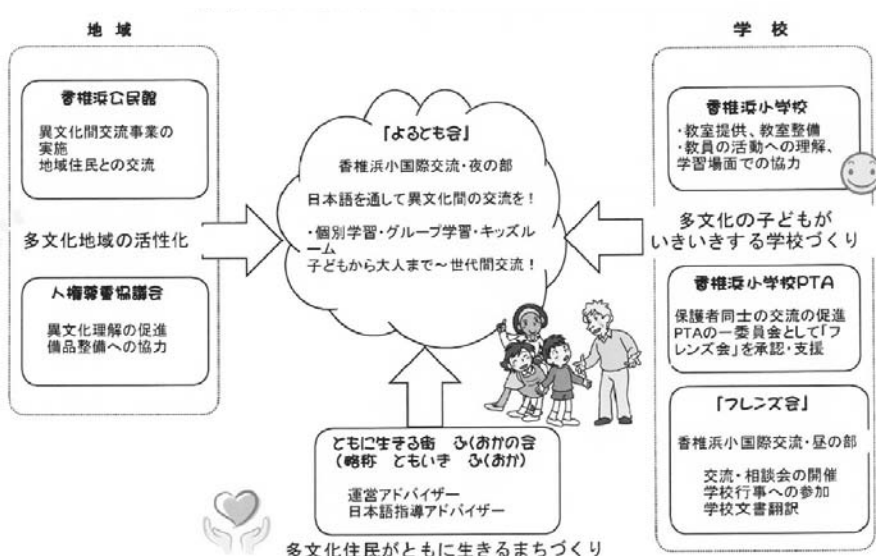
吉谷武志

◆ パニックでスタート

「フレンズ会」が出来上がって、活動していたのですが、お昼だけだと十分ではないし、もう少し広げたいという話がだんだん出来上がってきたときに、先ほど言ったように、日本語を真ん中に置いて交流をしましょうという話になったわけです。

ただ、最初はどのように設立していいのかよく分からないということでした。福岡は在日コリアンの方も多地域で、在日問題を一生懸命考えておられる方がいたり、市内の日本語教師のプロの方がいたり、学校の先生がいたり、さまざまな方が集まって「ともに生きる街ふくおかの会」（略称「ともいき」）という勉強会を以前から私もかかわってやっていました。古賀さんがそこを紹介されて参加し始めました。会でも何とかした方がいいということで、そういう会を立ち上げるなら、最初は開設の準備の勉強をしなければいけないという話が出ました。福

福岡市立香椎浜小学校親子日本語教室「よるとも会」連携図



岡市はあまりこういうたぐいの（地域のいわば日本語教育に素人の住民が主宰する）教室はなかったのですが、「よみかき教室」といって、夜間中学校をつくりたいという活動をしておられる方がいたので、そういう人たちのアドバイスも入れて、約半年勉強をしました。

03年4月に発足したのですが、その前の年の秋ぐらいから勉強を始めて、僕の記憶によると、1月からほとんど毎週のように勉強会を続けて、忘れもしないその年の4月17日にオープンしましたが、最初はパニック状態になりました。なぜパニックかという、3つの教室を用意していたのですが、そこに夜6時半ぐらいに100人以上の外国につながる、中国帰国者とか、留学生とか、その家族とか、さまざまな方が集まってしまった。ボランティアは30人か40人。スリッパさえなかった状態で、パニック状態からスタートしたのです。

それからこれまでの間、問題が生じたとき、その都度どうしようかと考えながら古賀さんたちは、全部さばきながらやってきました。今は落ち着いて、だいたいスタッフ30人、学習者三十数人。長いこと一緒に勉強している方で、日本語がすごく上手になっている方は、スタッフ兼学習者といえますか、先生側に早変わりです。要するに、全く日本語が話せないで来る人がいますので、ずっと長く学習している人が、スタッフに早変わりをして、勉強会をするということです。基本的には1対1を大事にしましょう、お友達づくりを大事しようということに重きを置いてやっています。

◆ 地域の人たちが関心を持つ

「フレンズ会」と「ともいき」の2つから「よるとも会」が成立してきたということです。ただ、その間には、先ほど出ていましたが、地域との関係があります。100人の外国人、スタッフを入れると140～150人が夜突然、団地の真ん中にある学校にゾロゾロと集まる。これって、地域の住民は怪しい感じをもちます。そんなことで噂も広まり、何をしているんだろうということになったときに、実は人尊協＝「人権尊重協議会」という福岡市の充て職というか、地域のさまざまな役職者、校長さんとか、公民館の館長さんとか、自治会の会長さんとか、そういういわば偉い方々で構成している組織があります。そこから、「いったい何をしているの」ということだったので、「一度見学してください」という話になりました。見学をしていただいた後に、「せっかくの見学ですので紹介します」ということで、内容などについて、説明しました。最初はすごくキツイ感じだった人が「ハマって」しまいました。「そんなにやっているなら、もう少し応援してあ

げないとだめだ」という話になって、それ以降、人尊協もいろいろな支援をしてくださったりします。スリッパがないんじゃないのとか。学習発表会とか、夏祭りとか忘年会をやる時にも見に来てくれて、関係ができてきました。

公民館館長さんも主事さんも人尊協のメンバーで、06、07年の2回にわたって、公民館でサポートしましょうということで、国際交流のイベントをやってくれました。餅つきをしたり、食事会をしたり。公民館も我々を念頭に置きながらやってくださっています。

◆ 学校の先生も参加

香椎浜小学校は、場所をずっと貸してくれています。香椎浜地域は少子化が急速に進んでいて、かつては1,000人以上の規模の学校でしたが、今は400人ぐらいしか児童がいません。大量に空き教室があり、そのうち3つぐらいをずっと使っていて、ひとつは丸々私たちの部屋です。教材も全部置きっ放しにでき、木曜日の夜はだいたい常時3教室使っています。大人の学習室が2つと、もうひとつは小さいお子さんが来るのでキッズルームにしています。スタッフの中にはずっとキッズルームを担当されているお母さんもいらっしゃいますが、そこで日本の子どもたちも一緒に遊ぶ。子どもは赤ちゃんから高校生ぐらいまでいます。ということで、一緒にゲームをしている子もいれば、学校ですから、黒板に落書きをして楽しんでいるのを誰かが見ているということをやっています。

この学校の先生もずっと木曜日に見に来てくださいます。それから、近所の中学校の先生、校区の小学校の先生、そこにも日本語教室があるのですが、その先生たちもだいたい毎週お見えになっています。ところが、日本の子どもたちがいると、中学校の先生はプロですので、彼らがその子どもたちをつかまえて、今日は宿題はあるのと言って、学校ですので、机といすがいっぱいありますから、先生たちをお願いして、学校の宿題を留学生のお子さんと日本のお子さんと一緒になって勉強をしています。教科書も全部ありますので、先生が来て教えてくださっています。学校の方もそういう協力をしてれています。学校との関係でいえば、学校自体は、親の方の反応が全然分からないということで困っていたこともあり、古賀さんに聞けば分かるよみたいな形で理解が進み、お互い連携し合うという形になっていきました。

私たちのところはプロの日本語教師もだいぶ入ってくれていますが、地元の住民が中心になって、こうした活動を続けています。日本語をガリガリ勉強するというよりも、挨拶ができるような関係をつくりましょうということを一番大事に

しているという日本語教室です。その中で、日本の子どももボランティアの大人もユックリ成長していこうということをやっています。今、実はこの会場にも、この春、東京の大学に進学したボランティアの高校生が来てくれています。そして、帰省したときに「よるとも会」に来るということが続いています。

◆ もっと地元住民を巻き込みたい

ただ、課題もあります。学習内容というか、やっていることをもっと地域に見せたいと考えています。一般住民にはなかなか広がらない。もっとオープンにして、いろいろな方たちに見に来てくださるようにしたいと思います。私たちのところはいつ来てもいいし、協力できるときにだけやればいいというやり方をしています。ボランティアの方も日本語教室の方に当初から参加して下さっていて、そのときはアマチュアだったのですが、今はプロの日本語教師になった人もいます。その人は学期の合間に半年に2、3回来るようなボランティアです。それでも私たちは構わないし、学習者も半年ぶり、2年ぶりに来ましたという人もいます。それでもいいだろうということで、よく来たねというふうにいつでも歓迎しています。ただ、それを維持するために、さまざまな人たちに理解をしていただくように学習内容の公開をしようと思っています。

あと、最大の問題はお金です。文化庁からもらったり、福岡市国際交流協会からもらったり、いろいろと手を替え品を替えしていますが、これはきついです。ただ、場所も電気代もただですし、冬でも九州（福岡）の学校は、ストーブを入れられないのですが、この教室はストーブが入れられ、学校の方でいつの間にか灯油を入れてくださるという状況が続いていまして、助けていただいています。

藤田 古賀さんもまだまだ話し足りない部分もあると思いますが、後半でまたお話いただきたいと思います。それでは最後に、「川崎市ふれあい館」の学習サポートの取り組みについて、原千代子さんからお願いします。

■ 「川崎市ふれあい館」

原千代子 この東外大の協働実践研究で、外国につながる子どもたちの取り組みを地域から育むということで、「ふれあい館」をそのテーマにのせていただきました。今のところ学校との連携や行政的な位置づけというのはこれからやっていこうという段階です。愛知と福岡の方の実践のお話をうかがいながら、私たちは